
しあわせになるために

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせになるために

【Nコード】

N7095G

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

私にとって泉野真理って言うのは鬱陶しい存在で。だけどそんな私にайいつは優しかった。いつでも。

永遠のスプリンター 1

「お姉さん。この曲知ってる？」

駅の簡易宿泊所に私はその時居て。

簡易宿泊所にはいろんな人が泊まってて。

その場所で他人に話しかけるだなんてタブーに近かった。だってみんないろんな事情を抱えてるから。

私に話しかけたその若者はある意味怖いもの知らずというか。何というか。

♪♪幸せになるために君へ歩いていこう

♪♪いつまでも一緒に歩いていこう

その若者が持つてるラジオから聴こえたのはよく知ってる歌手の歌だった。

「その歌のこと？」

私が問うとその若者は2番になっちゃったけどね？
そう言った。

「それは泉野真理って歌手がウェイトフォーユーってバンド作って歌ってる曲だよ。」

私がそう答えるとその若者は私を見て。

「お姉さん。ものしり〜。」
って言った。

「…あんた。からかってんの？」

私が低い声でそう言うのと。
滅相もないと呟いた。

「俺さ。お姉さんの事見たことあるんだよね。雑誌で。
私は即座に否定して。」

「：勘違いじゃないの？」

話しかけるのが憚られるような場所で。
平気な顔で話しかけてくるその若者はゴソゴソと自分のリュックを
探して。

「ほら。」

と見せた先には。

確かに私が映ってた。
それは陸上の専門雑誌。

私が足が速かったころの雑誌だった。

「それは私じゃないよ？」

「えっ？」

「双子なんだ。私。それは姉の方。」

さらにえっ？とその若者が言うから。

私はイラついて。

「私はそんな雑誌に載るほど速くないから。」

確かにそこに映ってたのは私の顔をした双子の姉がおるだった。
私には眩しかったよ。
かおるが。

いい意味で私にコンプレックスを与えてくれて。
私の思い上がった鼻っ柱をへし折ってくれて。
だけどそれに気づいたのはいつごろだったか。

永遠のスプリンター 2

「光子。部活何に入るの？」

話は中学時代にさかのぼって。

私は昔からこの私と同じ顔をした双子の姉が苦手だった。屈託なく話しかけてくるその姿は私には眩しすぎて。太陽のように笑う笑顔が疎ましくて。

「別にあんたに関係ないじゃない？」

そう返しても静かに笑うだけだった。

姉のくせに私がどれだけぶっきらぼうに喧嘩を売っても絶対買わなくて。

姉が怒ってる姿を全然見たことがなかった。

両親は私が可愛くないから姉のかおるを本当に猫かわいがりして。

自分でも判ってるんだよ。

私が可愛くないことぐらい。

でも私は足が人より速かったから中学に入ったら陸上をやるうと思ってたんだ。

そしたら双子ってよくシンクロするって言うじゃない？

相談も何の素振りも見せなかったのにかおるも同じこと考えてたみたいで。

いざ陸上部に入ってみたらかおるもいたんだ。

「あんたたち双子？」

当時の女部長がそう言ったことを今でも鮮明に覚えてる。

「えっと。」

かおるが答えようとするところに私は横やりを入れてやった。

「単なる他人です。」

かおるは何も言わなかった。

ただ悲しそうに眉をひそめただけだった。

私は今でも後悔してる。

本当に言わなきゃならない言葉を言える時って案外少ないってこと。
目の前からその人が消えてしまうのは一瞬のこと。

消えてしまったらその人を救う言葉はもう届かないって。

いくら悔いてももう手遅れだってこと私はこの時は若すぎて意固地で知らなかったんだ。

永遠のスプリンター 3

私がひそかに好きだった同じ陸上部の片桐先輩は私じゃなくかおるを好きになって。

かおるは私が片桐先輩を好きなことを知って。

私に遠慮をしたから。

また私はキレたんだ。

どうして。

思いは消えない。

だって好きになってくれることはありがたいことで。

本当は私だって祝福したいって思ったのに。

かおるを好きになってくれてありがとうって素直に言える機会はなくしてしまったけど。

人を好きになってそれが返ってくるなんて方に等しいって知ってるのに。

私知ってるんだ。

ヒガミ根性が象ってる私の性格を。

何がいけなくて何がいいことかも。

かおるは完全に勘違いしてた。

私に自分が大事な何かを譲れば私に嫌われないって。

私にはそれは余計なお世話だったし迷惑だった。

かおるが私のこと大事に思ってくれてることはよく知ってたのに。

なのに勘違いするかおるは。

私が偶然片桐先輩に告白されてるかおるの現場に居合わせたとき。聞こえたんだ。

「私じゃなくて私のこの顔が好きなら光子と付き合ってくださいよ。あなたのこと光子は大好きで。

私じゃなくていいならどうか。」

かおるが頭を下げたところだった。

私はそれが我慢ならなくて。

気づいたら車道へ走りだしていた。

こんなにズタズタになるぐらいなら死んだ方がましだとも思ったんだ。

本当は車道に飛び出す気だっけなかったのに。

かおるが。

かおるの大馬鹿が。

私より速い脚をもったかおるが。

私を突き飛ばして勢い余って車道に飛び出したんだ。

…それはダンプカーの前だったんだ。

壊れかけた私の心 1

よく自分の周りにはそんな不幸な出来事は起こらないってなぜか確信してて。

だからテレビに出てくる事故の被害者に私は「お気の毒だね。」としか思わなかったし。

そんなことがまさか自分の身に降りかかるなんて思わなかった。なんて身勝手でなんて浅はかなんだろう？

ダンプはかおるを避けようとして横倒しになって結構すごい事故になった。

かおるは。

かおるは右足を挟まれて。

意識がなかった。

それからの事はよく覚えてない。

ただ片桐先輩がテキパキとみんなに指示を出して。

かおるにずっと付き添っていたことを覚えてる。

この頃から私は本格的にかおるが苦手になって。

かおるの怪我は右足切断というかなり深刻なものだった。

感染症にも気を遣って。

だけど持ち前のガッツで自助具によって走れるようになったんだ。

私は面と向かって言ったことはなかったけどすごいと思ってたよ。

この頃の私は本当にやさぐれていて。

素直になれなくて。

お礼だって言わなかった。

自助具に頼る生活になったかおるはやっぱ怪我をする以前のまま。素直なままに私にも笑いかけるんだ。

わけわかんないって本当に思ってたよ。

そしてこの頃から実母が精神に異常をきたし始めて。

私とかおるの区別がつかなくなってきた。

ある意味母には私よりかおるっていう自慢の娘が死んでしまうかもしれないと恐怖に駆られた結果だと依存症だって医者が言ってたんだ。

かおるが義足になってから陸上の雑誌が取材に来たことがあって。その時かおるはその号の表紙になったんだ。

壊れかけた私の心 2

多分かおるからすればこんな私を仕方なく思っ
て。自分が閉じたら終わりだって思っ
てたんだらう？

私とかおるとそして片桐先輩と腐れ縁
みたいになり同じ高校になった。
かおるは陸上で推薦貰うはずだった
のに私のせいで一般になった。
私は陸上推薦で行くのは癪だから
一般で受けたんだ。

そして。

私が一番憎くて一番大好きな人間と
会った。

それは泉野真理。

どうしても憎くて私は犯罪まがい
に金で人を雇って泉野を呼び出し
て。

犯してやろうって思ったんだ。

私は直接は手を下してないけど。

女としても人間としても最低な行
為だった。

何処かで泉野は有段者だから切り
抜けるだろうと思っ
てたのに。
呼び出し場所に私が向かった時は
もう既に犯される寸前で。

聞いたら無抵抗に捕まったって。

有段者なんだから。

有段者なんだから抵抗しまくる
って思っ
てたのに。

「やめろ〜〜〜!!!」

そこへ泉野を助けに来たのは泉野
の彼だった。

ああ。私には眩しくて。

その時派手に変な音がしてきつと骨が何本かイカれたような音で。不自然に曲がった足を抱えて泉野の彼は苦しみだしたんだ。

その時私は半裸状態の泉野に叩かれた。

「光子。私一矢をこんなにしたあんたを許さないから。」

ああ。私もだよ。

女としても人間としても最低で。犯罪だということも知ってたよ。

なのに。

泉野は私を訴えなかった。

だから私はこの時も図に乗って。

泉野ならいくら踏みつけても傷つかないと高を括ってたんだ。

壊れかけた私の心 3

そして。

私はある日学校で片桐先輩とかおるのキスシーンを見てしまった。

まだこんなにも。

傷ついてる自分が嫌いで。

走り出してしまった自分を止められなくて。

車道に出て死んでしまえばこの苦しみからも解放される。

そう望んで。

でも。

腕を引っ張られて寸前で止められて。

代わりに車に轢かれたのは。

かおるだった。

かおるは瀕死だった。

私は突き飛ばされたおかげでかすり傷一つなくて。
鼓動は弱々しく。

それからの事は断片的にしか覚えてなくて。

泉野に引っ張られ私はかおるが運ばれた病院に座ってて。涙も出なくて。

片桐さんが私に言った言葉は真実だった。

「お前とかおると何が違うか教えてやろうか？」
頷くと。

「表情が全然違うんだよ。

かおるはお前と同じ顔してるからって勘違いしてたみただけど。
俺はちゃんとお前とかおるが同じ服着たって見分けられる。
愛してたんだ。」

かおるの事愛してる。

私だって。

私だってかおるが好きで。

憎くて憎くて。

でも大好きで。

そこへ泉野が息せぎってやってきて。

涙がなくなるんじゃないかってぐらい泣いたんだ。

私はいたたまれなくて。

「片桐さん。私はかおるに助けてって一言だって頼んでません。」
涙も出なくて。

可愛げがなくて。

「そして好きで双子に生まれたわけじゃないし。」

それは決定的だった。
きっと決定的なひと言で。

それにキレた泉野が初めて私の頬をたたいた。

この間だってその前だって私がいくら悪態をついても手を上げることもなかったのに。

低い声で泉野は言ったんだ。

「どうして光子はかおるのことが判らないんだ？」

取り返しがつくときに。
謝る機会がある時に。

「お前にはわからない。」
私も負けじと声を張り上げて。
本当はかおるに付いていたかったのに。
叩かれたショックと言葉で。
病院を飛び出してしまった。

かおる。

かおる。

私の半身。

走り出してしまうて。

誰も追ってこないのを確認したら。

おお泣きしてしまった。

涙が枯れるぐらいに。

光に包まれて 1

でもこの事件は大きくならなかった。

誰かが抑制をかけたのかそれとも泉野の仕打ちか。

何にしても学校に行っても何事もなかったかのように何にも聞かれなかった。

勿論かおるの葬儀やいろいろあったけど何にも言われなかった。
むしろ責められた方が私は反発できてうれしかったのに。

みんな私に触らない。

みんな遠くで様子をうかがってる。

父が言ったんだ。

「原因はお前か？」と。

かおるが死んだのはお前のせいかと。

私は一応答えた。

「助けてなんて言っていないのに勝手にかおるは私を突き飛ばして車に轢かれたんだ。」と。

「光子。母さんはお前のことが判らない。

認識しようとしなから。

それでもお前は耐えられるか？」

父は私が言った言葉を聞いてなかったかのように言ったから。

「父さん。聞いているの？」

そう言ったら。

「何となくな。予感がしてて。

お前が無茶してかおるがお前の事助けて。

そんなふうになるんじゃないかって思ってたから。」

父は続ける。

「お前のせいでかおるが義足になった時も。

かおるがお前を責めなかったから父さんも責めてもなって思ってた。

もう光子は充分苦しんでるってかおるが言ってたのを思い出してな。」

父とかおるは仲が良かった。

母とも仲が良くてそれを羨んでたのは私。

「ずいぶん辛い思いしてたんだってな。

わからなくてごめん。」

父からの言葉に私は…。

私は。

だって私が可愛げがないから。

可愛くないのも当たり前だし。

でも本当は愛されたかったんだ。両親に。

大好きな両親に。

大好きで憎いかおるに。

「母さんはお前のことが判らなくて混乱してるからどうしようかと思っ

た。光子が良ければだけど一人暮らしをこの際だからしてみたらどうかと思っ

以前の私ならきつとこう返してる。
あんたの指図は受けないと。
でも謝ってくれただけで十分だった。
不思議と。

もうこれ以上閉じてても何にもならないってやっと判った気がしたんだ。

「父さん。私ね高校卒業したら南に行ってみたいんだ。
お金も貯めてね。」

母さんのことはよろしくね。
時々会いに来るから。」

私が初めて自分の意思を表示した瞬間だった。
そして泣いたんだ。
本当に心からの涙だった。

抱きとめてくれた父の腕は温かった。

光に包まれて 2

そして。

泉野から家に手紙と共にライブチケットが届いた。
良かったら見に来てと書いてあつて。

私は当日そこに居合わせたんだ。

私が以前泉野を犯すために雇ったチンピラが逆恨みをして泉野のライブ会場を襲撃した時に。

銃声が聞こえたときはもう泉野の隣にいた子が倒れていた。
そしてもう一発今度は泉野が狙われて。

パッと振り向いたときに形相でわかった。
こんなにやばい奴を私は雇ったのかとゾツとして。

ライブ会場はパニックになった。

楽屋に通る道もガラガラだった。
みんなパニックで。

真理が撃たれただの。
聖子が重傷だの。
鞠子を守っただの。

一矢がないだとか。

一矢には携帯も通じなくて。

呼びに行く人が誰もいないって誰かが言ったから。

こんな私でも許してくれた泉野に感謝したくて。

私は名乗りを上げたんだ。

「良かったら住所さえ教えてもらえれば走って呼びに行ってきますけど。」

「あなたは？」

「泉野真理の友達です。」

「そう？じゃあお願い。30分以内に呼んできて？」

じゃあ？と走り出そうとしたら。

「あなた。名前は？」

そう聞かれた。

「私は光子。井上光子。」

「井上さん。よろしくね？」

私が走りが速かったのは。

この時に役に立つためだったんじゃないかって今では思う。

神さまが私にまだ生きてかおるの分も生きて。

泉野の役に立ちなさいって言ってる気がして。

単純だけど嬉しかったんだ。

光に包まれて 3

一矢は叔母さんのところにいて。

私が現れるとすごい形相で私の首をつかみ。

：仕方ないんだけどね。

一矢が大怪我したのは私のせいだし。

私は息が出来なかった。

このままじゃ絞殺されるって思った。正直。
だけど。

一矢の叔母さんらしき人が止めてくれた。

「一矢。いい加減にしなさい。」
そうじゃなくて。

私は絞殺されても本望だと思った矢先だったから。

だけど。

もし私が泉野のこと言えなかったらきつと。

泉野だって一矢だって後悔するから。

私は咳きこんで病院の名前のメモを渡したんだ。

瞬間一矢は顔色を変え。

私にゴメンとつぶやいたんだ。

どうしてそう人に潔く謝られるの？
ずっと疑問だった。

だけど答えは簡単で。

素直に謝られるのはその人が変なプライド持ってないから。

泉野にしても一矢にしても。

目の前で私の話を聞く男の子は。
私の手に自分の手を添えて。
言ったんだ。

「光子さん。後悔してるんだね？」
「：っ。」

私何言ってるんだろ。
初対面に近い男の子に何語ってるんだろ？

涙があふれた。
本当はこんなに簡単だった。

胸の内を明かすことは。
聞いてくれるって安心感は。
手元には私と同じ顔でほほ笑むかおるの写真。

：電車が来て。
私はその男の子と反対路線に向かう。
その子は北へ。
私は南へ。

もし今度会えたら。

その時はまたいろんな話聞いてね？

そう柄にもなく心で呟く。

「じゃあね？」

私は南へ下っていく。

肩の力をちよつとだけ抜いて。

泉野の歌と共に。

後日。

泉野が私のところへ乗り込んできた。

私が面倒そうに眉根を寄せると泉野は。

「光子はそうでなくちゃ。」
そう言ったんだ。

うん。頑張ってみるよ。

たとえ母が私の事忘れても。

かおるがいなくても。

頑張ってみるよ。もう少しだけ。

終。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095g/>

しあわせになるために

2010年12月10日02時22分発行